

福岡市

老司古墳

第5集

調査概報

1966~1969



1969年3月

福岡市教育委員会

発刊のことば

5世紀前半に築造されたと推定される原始的横穴式石室を有する老司古式古墳は、現在の時点では、本市現存のこの期の前方後円墳としては、最古のもので、中期古墳の性格と前一後期古墳間の様起的追究を行なうことができ、古代文化の究明に欠くことができない意義をもつ貴重な古墳であります。既に、昭和41年度から2年次にわたり県教育委員会で発掘調査を実施されましたが、実態の全容が十分把握されていないので、国・県および九州大学文学部考古学研究室の要請もあって、今般、九州大学文学部考古学研究室、福岡少年院の協力を得て総括的な緊急調査を実施しましたところ予想以上の成果をあげることができました。

このことは、ひとえに関係各位の文化財に対する深いご認識とご援助によるものといえましょう。

この調査概報を古代の郷土文化史研究の一資料として各分野で活用いただければ幸いです。

なお、本書の発刊にあたって、調査および原稿の執筆を担当された九州大学文学部考古学研究室教官、研究室員はじめ、福岡少年院、県教育委員会関係各位のご協力に対し、深甚の謝意を表します。

昭和44年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 長 東 正 之

目 次

I	老司古墳の発見	1
II	墳丘の調査	3
III	第1号石室の調査	4
IV	第2号石室の調査	7
V	第3号石室の調査	9
VI	第3号石室の墓道の構造	11
VII	第4号石室の調査	15
VIII	おわりに	16

例　言

1 老司古墳の調査は下記の段階にわたって行なわれた。

予備調査 昭和40年8月8日～8月11日

" 昭和41年4月6日

第1次調査 昭和41年8月5日～8月14日

第2次調査 昭和42年8月5日～8月24日

第3次調査 昭和44年3月10日～8月17日

2 表紙の老司古墳の航空写真は福岡県教育委員会提供

3 表紙題字は福岡市教育委員会指導部長大蔵富繁氏筆

発掘調査関係者

予備調査参加者 森貞次郎 小川富士雄 石松好雄 前川威洋 宮小路賀宏 下条信行 橋口達也（九州大学考古学） 福岡高校生

第1次調査参加者 銀山猛 岡崎敦 森 小田 下条 橋口 黒野肇 松本肇 安倍芳一（九州大学考古学）佐野一（九州大学人類学） 宮小路（福岡県教育委員会）
石松（奈良国立文化財研究所） 長洋一（福岡高校教諭） 山内幸子（双葉女学院教諭） 山崎正法（香椎高校教諭） 福岡高校生

第2次調査参加者 銀山 岡崎 森 小田 下条 亀井明徳 佐田茂 橋口 上田和子 高倉洋彰 西田京子 清水直美 古賀紀美代 松本 藤口健二 貞方敏 安倍（九州大学考古学）佐野一 石松 福岡高校生

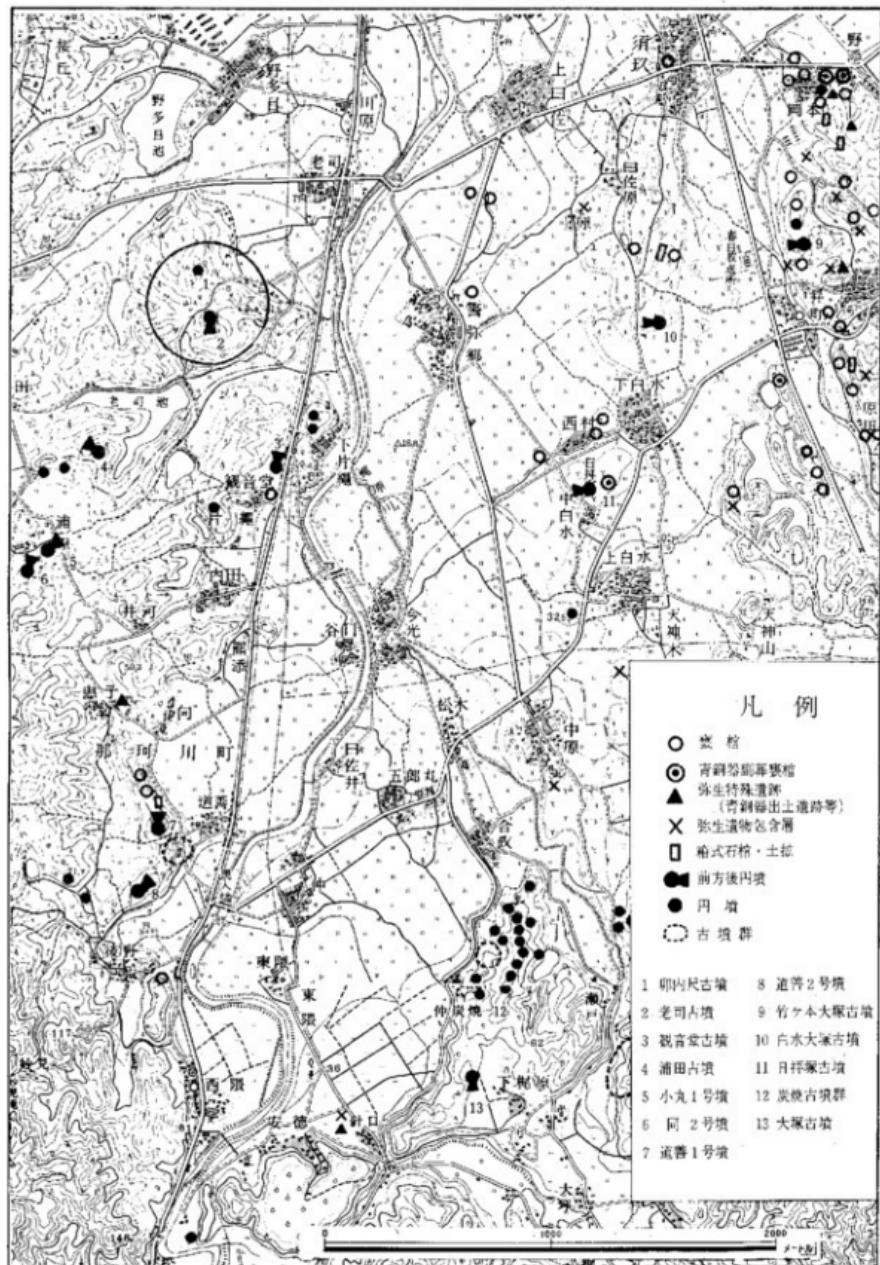
第3次調査参加者 銀山 岡崎 森 小田 下条 亀井 佐川 橋口 塙屋勝利 高倉 藤口
真野和夫 優永博行 貞方 岩崎二郎 松木 西健一郎 真明誠（九州大学考古学） 永井昌文 佐野（九州大学人類学） 武末純一（九州大学教養部）
福岡高校生

福岡少年院 井上謙二郎 柳沢昇 竹村未光 渡辺次郎 鶴丸重海 少年院教官諸氏
少年院生徒各位

福岡県教育委員会 結城庸夫 渡辺正氣 松岡史 宮小路賀宏 柳田康雄

福岡市教育委員会 長束正之 青木崇 清水義彦 石橋博 山口俊二

老司古墳の環境（福岡平野南部の遺跡分布図）



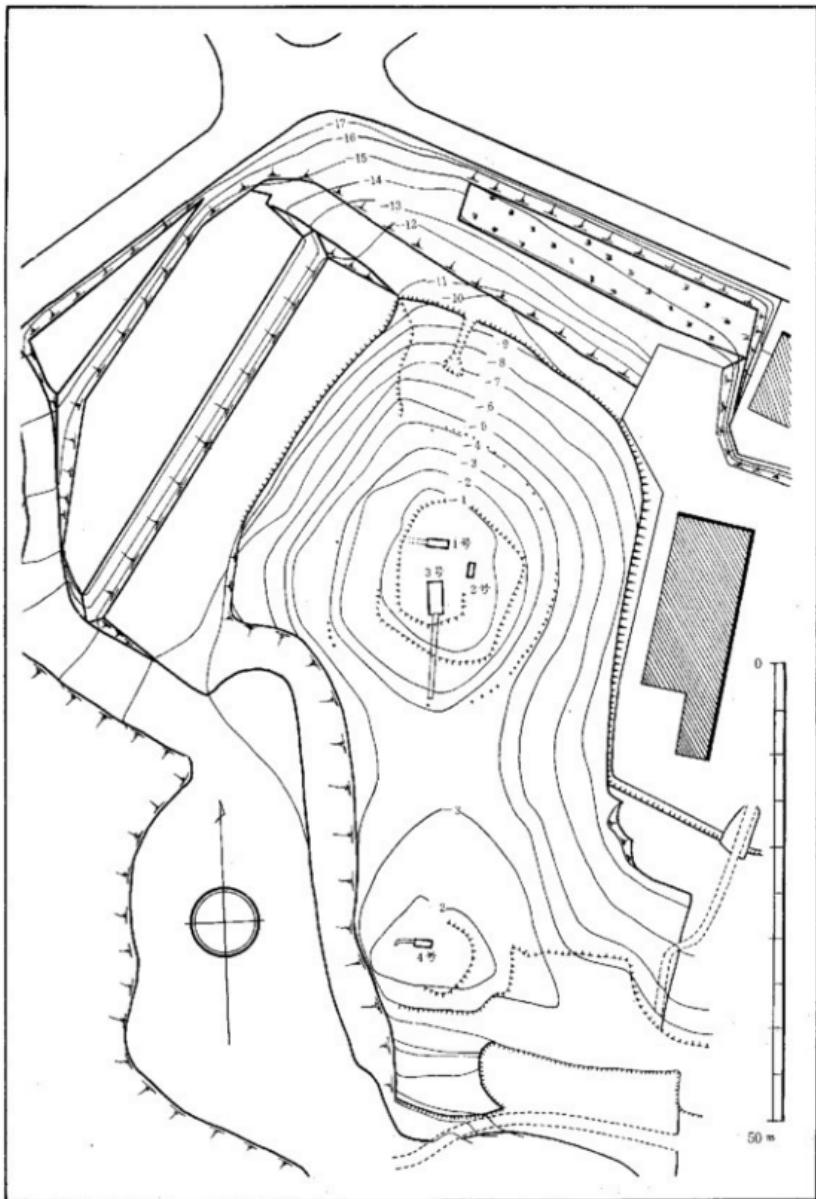


西よりみた古墳全形（左が後円部）

I 老司古墳の発見

老司古墳は、福岡市を中心とする那珂川の中流左岸の丘陵上にある、長さ約90mの前方後円墳で、福岡市老司字大谷にあり、字卯内尺との境に位置する。この丘陵の東麓に奈良時代初頭の瓦窯跡があったため戦前からこの地を訪れる者が多く、若干の瓦が、そこにある福岡少年院に保管されていたが、それら遺物のなかに土師器の器台があり、それが裏山の、盗掘孔ある古墳の附近から発見されたことが伝えられていた。盗掘孔はなかば土で埋もれ、石蓋の上の厚い白色粘土の被覆層の断面がのぞき、それが堅穴式石室をもつ古式古墳であることが推定されていたが前方後円墳であることが判明したのは、戦後この丘の表が切り開かれてからのことである。戦後少年院の改築、敷地拡張のための採土整地工事が急速に進行して、古墳は崖上に孤立する状態に立ち至り、さらに破壊消滅する可能性が推定されたので、昭和40年夏、福岡少年院長井上謙二郎氏の厚意を得て、墳丘の実測を行ない、後円部の盗掘孔の清掃を行ったところ、残存遺物がある可能性が推定されたこととさらに、後円部におほかに埋葬施設が存在することが推定されたため、調査を一切中止し、あらためて、翌41年夏本格的な調査を開始し、まず後円部の調査を行ない、さきの盗掘孔ある第1号石室のほか、新たに第2号石室を発見調査し、第3号石室の一端を発見しただけで調査を中止した。第2次調査は、昭和42年夏に行なったが、第3号石室および、墳丘をめぐる壺形埴輪の調査と葺石の調査を行ない、一方、前方部に第4号石室の存在を確かめて終了、第3次調査は、本年3月、前方部の第4号石室の調査および、第1号から第4号までの石室に伴う壺割式の墓道の調査を行ない、あわせて、埴輪列の調査を行ない、ここに多大の成果を得て、この古墳の発掘調査を終了した。老司古墳の横穴式石室の始原形態を示す内部構造ならびに遺物の組合せは、5世紀前半の九州古墳文化の上にきわめて大きな価値をもつことは、本概報によって一応提示されていると思う。本調査にあたって、最も感謝にたえないのは、院長井上謙二郎氏が、少年院の敷地整備拡張のために、この古墳の台地全域を削平する当初の計画を変更され、この調査を承諾されたのみならず、少年院という制約された環境のもとで、許される最大限の協力をおしまれなかったことである。本調査にさきだち、われわれには、いま一つ小さな期待があった。それは、旧秋月藩士江藤正澄の自筆本『福陵雜纂』三（九州大学図書館蔵）にみえる那珂郡老司村卯内尺で、明治20年10月に発掘した三角縁三神三獸鏡が、この古墳出土のものではないかということであった。また、たまたま所在不明のその鏡の写真が、第1次調査中に、東京国立博物館の三木文雄氏から、蒲郡市の荻昌弘氏所蔵品として届けられ、卯内尺の古墳の所在調査を依頼されることなどもあった。しかし、この鏡は、老司古墳の西北200mにある粘土塚をもつ円墳から発見されたものであるらしいことが、江藤正澄の『雜纂』二の「古鏡の記」と、現地の中村憲之助氏の証言によって明らかになったことも一つの収穫であった。この古墳は老司古墳の一世代前の同族のものとみて差支えなきようであって老司古墳調査の副産物であるにとどまらず、僕人伝にいう奴国の地域における古墳時代の考察に有力な一資料を加えたといわねばならない。なお第2次調査は福岡県教育委員会、第3次調査は福岡市教育委員会の委嘱によるものである。（森）

老司古墳実測図（号数字は石室番号をあらわす）



II 墳丘の調査

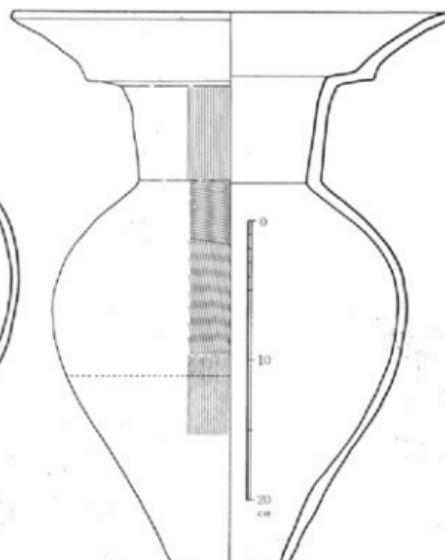
本古墳は花崗岩のバイラン土壤の上に作られた前方後円墳で大きさは基部がけずられて明確でないが主軸長90m、後円部径45m、前方部長30m以上をはかる。後円部は前方部より2m程高い。

墳丘外表面の敷設物として、葺石と埴輪の二種がある。葺石は部分的には欠失したところもあるが、ほゞ全面にわたって礫石大の小石が敷設されている。埴輪は前方部上にも若干の破片が出土しているが、後円部の一3m~一5mの線上に多く発見され、確実なものだけで、41個の埴輪が数えられた。多くは、60~70cmの間隔ごとに据えられている。埴輪には三種類の器形があり一つはや、外反した頭部の上に複合口縁を附すものと、口縁が直線状にや、外反して、底部附近で一旦すぼまる形式のものがあり、この両者の表面には土中に埋設する部分を除いた全面に丹が塗られている。

第三は円筒埴輪で3号石室の主軸上の北側と、東側に直角方向に2個発見され、断面コの字状の帶がめぐらされている。(下条)



(上) 蔷石および埴輪の出土状態 (下) 墓輪実測図





西よりみた1号石室の出土状態(開棺前)



西よりみた1号石室の出土状態(開棺後)

III 第1号石室の調査

後円部の西寄りに設けられた竪穴式石室で、主軸は E 20° S である。扁平割石を小口積みにして構築され、210×95cm の長方形プランをもち、高さ 80cm、天井には 3 枚の蓋石を架けている。古くから北側の側壁を崩して盗掘したために石室内に入出できるようになり、壁面の崩壊箇所もいくつかみられるので、土砂が流入していたがさしたる量ではなかった。

石室内はかなり荒れているので遺物の残ることは期待していなかったが、発掘してみると意外にも多くの遺品があらわれて、盗掘がごく一部分に終っていることがわかった。

中央部に鏡鑑 1 面、滑石製小勾玉群がありそのや、南に硬玉製勾玉と碧玉製管玉の群があつて、被葬者の身辺につけられた状態をしめしている。南西隅には刀・劍・鎌・鍔手刀子などが、側壁沿いにまとめてあり、また北西隅には劍のほかに刀子・矛・鎌・鉈・鎧先・砥石などの工具類が集められていた。東壁ぞいには蕨手刀子・刀子・鎌がかたまっているが、さらに赤色を塗った器台形土師器の破片が発見された。これは以前に同一個体になると思われる器台形土師器の大部分がとり出されて保存されているところから全形をうかがうことができるので、石室内に安置するという珍らしい例であることが知られた。以上を総合して本石室の時期を 5 世紀前半代に比定してよいであろう。

石室の構造上注意をひくのは西側小口壁に棚状構造があり、その外に扁平石を立てかけた状態がある。この西側に一種の墓道状の通路がつくられていて、この部分では立て石の外側につめ石や粘土などが多く、追葬にあたって立て石をのぞいて斜め上から石室内におりる構造であったと考えられる。(小田)



1号石室内东半分遗物(镜、器台片)出土状态



1号石室西半分铁製工具類出土状态



1号石室東壁附近の器台片、刀子出土状態



1号石室出土方格規矩文鏡(D 11.5cm)



西よりみた 2 号石室出土状態(開館前)

IV 第 2 号石室の調査

第 2 号石室は第 1 号石室の東側より 1.10m はなれて、コの字状に南側に折れまがり、主軸をほぼ南北に近い N7.5°W に向けて存在する。墓塚は長軸 330cm、短軸 170cm を測り、隅丸の長方形状を呈しており、中央に設けられた竪穴式石室との間は粘土とぐり石で充填されている。蓋石は板状の厚い粘土岩で、4 枚ならべておかれ、中央に向かって両短側より傾斜している。蓋石と蓋石の接合部の間には、小板石と粘土を用いて封じ固めている。石室は小板石を小口に積んだ竪穴式石室で、上端で長軸 180cm、短軸 40cm を測り、下底部では長軸 175cm、短軸さす 60cm、高さ 60cm を測る。東側の石室中央部は土圧のためにせり出して、55cm を測るにすぎない。全体的に東側長側壁の歪みがはげしい。石室北側の短側壁は長壁と同様の小口積みをみせるが、南側の短側壁は注意すべき構築をみせている。最下底部より 4 枚の扁平石を小口積みにし、それより上部は 1 枚の板石をたてて壁を形成している。板石は小口積みの最奥部にたてているので、小口積みの最上部は棚としてのスペースを残している。

遺物は主として武器具を中心東壁沿いに出土している。三角板革縫短甲は一部は床面に落下し、全体的に石室の土圧によるせり出しのために、原位置を動いているが、本来は前にのべたような棚部に埋置されていたらしい。この短甲のすぐ下方の石室の東南隅には男性人骨の頭部が出土し、これに接して鉄鎌群が出土した。東壁沿いには、平行に南壁隅より鉢を北に向けた鉄劍 3 本、鉢に接して、その北には鉄鎌群や尾錠が出土している。他方北壁東沿いにも男性頭骨が発見され、本石室には差違に 2 体の被葬者が埋置されていたことが判明した。この頭骨の近辺には鏡鑑 1 面が副葬されていた。出土の遺物より考えて時期は 5 世紀中葉頃と考えられる。(下条)



西よりみた2号石室出土状態(開棺後)



2号石室南壁の三角板單鐵短甲出土状態



北側からみた3号石室と横断面にあらわれた墓道の出土状態

V 第3号石室の調査

第3号石室は後円部のはば中央に築かれ、墳丘の主軸に平行してつくられた割石小口積の堅穴式石室である。現在の墳頂部から約2mの深さに石室の蓋石をおいでいる。210cm×320cmの長方形プランで、高さは140cm、石室の主軸は西に1.5°ふれている。南壁は床面より55cmのところに階段がつくられていた。

副葬品は、石室の東北隅と西南隅の2個所を中心として、小疊の上にはば石室全面にわたって埋置されていた。まず石室東北隅から東壁に沿って鏡6面が発見された。東壁に平行して北から方格規矩鏡1があり、その南に「君宜高官」内行花文鏡1と方格規矩四神鏡1が、さらにその南に重圓文鏡1と方格規矩鏡1がいづれも鏡面を上にして2枚づつ重ねられて埋置されていた。さらにこの鏡列の東側に壁に接して「□氏作竟」三角縁神獸鏡片1が鏡面を上にして発見された。これらの鏡の付近に勾玉と多数の管玉を一組とする頭飾が、さらに東壁に平行して、環頭大刀、矛、劍等の武器類が置かれていた。北壁に沿っては、東から鉄鎌一塊、劍、鉢等が置かれ、さらに西北隅には土師器盤及びその上に土師器片が発見された。

次に西南隅では頭を南にする人骨が発見された。その歯牙付近から金環2、頭部より玉類、胸部と推定されるところから内行七花文鏡1と内行五花文鏡1が各々鏡背を上にして2枚重ねられた状態で発見された。西壁沿いに劍、直刀、斧頭、鉢先、砥石等が置かれ、さらにこの遺骸の足もとと思われるところに、劍、素環頭大刀が西壁に斜交して並置されその上に甲1が置かれていた。その他南壁付近に劍、刀子等の鉄製品と櫛が認められた。

以上のように第3号石室の副葬品の配列は2つの群に大別される。従って埋葬は2回にわたって行われたと考えられる。本古墳の石室のなかで第3号石室が最も古く、5世紀初頭に位置づけることができよう。(亀井)

南方部より見た3号石室通道



南よりみた3号石室出土状態（開棺後）



東北よりみた3号石室出土状態





3号石室南側小口壁の構築状態

VI 第3号石室の墓道の構造

3号石室の構造に関連して問題になるのは南側小口壁の外に横断面逆梯形の通路状掘りこみが前方に延びていることである。この通路は下底幅1.3mで石室主軸線(N 1.5°E)より5°ばかり西にふれながら前方部上面に抜けているので、墳丘主軸線と西側くびれ部の間を通る位置関係となる。この通路の底面は石室小口壁の上端につくっているので、あきらかに前方部から石室に通ずる墓道としての意味をもつものである。しかも小口壁の上には扁平大石が扉のように立てかけてあったので、一見横穴式石室に至る墓道と同種の構造を思わせる。しかしながら墓道の床面は小口壁の上端の高さであるから、石室の南側小口壁は他の壁面上端より若干低くつくられてはいるもの、扁平立石をのぞいて石室に入るとすれば、斜め上から石室内に降りるような方法をとることとなるのである。そこで、この部分の小口壁が中途から上の壁面を南に押し出して棚状の構造を示していることが注目されていたが、このような出入方法をとる場合には階段としての機能を果すものと解釈される。したがって本石室は基本的には竪穴式石室の範疇に入るものであるが原初的な横口式の技法をとり入れていると考えられる。次の段階では石室の床面を墓道床面の高さにあわせて構築することによって、完全な横穴式石室が出現することを予想できるのである。

1号或は4号石室にみる墓道も3号石室の墓道を小規模に踏襲したものであったとみられる。3号石室の墓道は長さ9m、墳頂からの深さも2mという十分実用に耐えるものである。老司古墳の築造当初に比定できる3号石室の墓道出現によって、従来5世紀中頃に考えられていた横穴式石室技法の導入問題はさらに約半世紀のばせて再考しようという重要な問題を提起するにいたったのである。(小田)



3号石室東壁 漢・魏鏡・玉類・鉄利器出土状態

3号石室東壁の方格規矩文鏡(左)、重圓文鏡(右)と玉類出土状態



□氏作鑄 三貴種押默鑄片

D 22.4cm

君宜高官 内行花纹鏡

D 12.8cm



方格规矩文鏡

D 12.5cm

重圓文鏡

D 7.9cm



3号石室北西隅の土師器盤出土状態

土師器盤の下から出土した鉄錠群

3号石室西隅壁沿いに出土した土器





北東からみた4号石室出土状態（開棺前）

VII 第4号石室の調査

この石室の構造は、後円部の石室と関連性をもつが、特に1、2号石室に近い構造といえる。割石状の扁平な石を小口積みにして構築している。その周りの墓壇内は栗石でとめている。墓壇の西端50cmの間は栗石がなく、粘土でしめており、埋葬時の作業に關係あることを示す。石室のプランは、長さ222cm、幅79cmの長方形を呈し、奥壁には1個の突起をもつ。入口の部分は棚を設けて横口となっている。棚の上には粘土を敷いている。塞ぎは横口にななめに板石をたてかけており、側壁も端はななめにして扉石をかけやすいようにしている。墓道は葺石の上端から傾斜をもって下り、段を設けて横口に続く。

壁は粘土によって石積みのすき間を埋め、石室内は全面に赤色顔料が塗抹されている。

石室の内部からは人骨3体と勾玉、劍、矛、刀子、鏡、銚、鐵斧、鎌、錐状工具、土師器（大形器台）が出土した。人骨は南壁に接して1体（成年男性）、中央に1体（老年男性）ある。老年男性人骨は原位置にあるが、成年男性人骨は右半分が相当動いており、その状況から見て、おそらく第1次埋葬になるものと思われる。また成年男性人骨の頭上に性別年令不明の左上腕骨が出土したが、これに關係する人骨は全然見当らない。そこでこの人骨が初葬の可能性も考えられるが、他の人骨の保存状況からして、1体そのまま埋葬されたとは考えにくい。この問題については今後の研究を持つ他はない。

出土遺物の中で問題となるのは土師器の大形器台である。これが一次埋葬に伴なうものかどうかは定かではないが、石室内への大形器台の副葬の事実と考え合わせて興味あることである。（佐田）



4号石室出土状態（開棺後）



4号石室東側小口壁の突起と遺物
(横倒しの器台と中央人骨) 出土状態

VIII おわりに

老司古墳の性格と年代 老司古墳は、那珂川西方の花崗岩風化土壌の丘陵を斜めに積み上げて築成された全長90mをこえる前方後円墳で、3次にわたる調査によって後円部に3個、前方部に1個の石室のあることがあきらかにされた。墳丘を河原石の躰石でふき、その周辺に底部がひらいて孔状となった壺形の埴輪がめぐり、円筒状の埴輪はきわめて少く、直角に点綴している。

この古墳で、解明された重要な事実はその石室の構造である。第3号石室は後円部の主体をなすもので、地山を土塙としてきりこみ、板状の石材で側壁をつくり、上を大石で覆ったものであるが、横口となり、これを板石で封鎖して、上に大石をおく。その前には墓道がほりこまれている。この横口の構造は、やや少異があるが第1号、2号、4号とともにみとめられた。第2号石室には2体、第4号石室に3体の人骨がみとめられ、第3号では2回の埋葬がみとめられる。畿内形の竪穴式石室はもともと一体をいれた木棺を粘土で被覆し、さらに板石で側壁をきずいてこれを覆ったものである。老司古墳の構造は竪穴式石室の形式をおそっているが横口となり、道溝に便利な横穴式石室初現の形式である。現在のところ最も古い横穴式石室とみとめられるのは興味がある。老司古墳のような石室は唐津市柏崎長崎山古墳などにもみとめられたが、この種の石室

の形式を仲介として、福岡市周辺古墳や、佐賀県東松浦郡浜上町横田下古墳などの横穴式の石室形式へ変遷したことが理解されるのである。

石室内部には土器器の大形器台や盤などがあり、豪華な埴輪とならんで、葬祭におけるセットが明らかにされた。遺物には、船載の三角縁神獣鏡（破片）はじめ、鏡はすべて10面、武器、農具、工具などをふくむ多量の鉄器や、玉類、櫛などの装身具が発見された。遺物や石室の構造などから考えて、四世紀にのぼるものでなく、五世紀初頭から中葉にかけての年代のものと推定される。

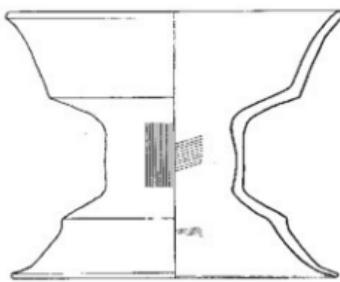
福岡・那珂平野と老司古墳 背振山塊より発した那珂川は北流して、那珂川町、春日町、福岡市のはず中央をながれて、博多湾にそいでいる。この流域には須玖岡本、弥水原をはじめ弥生式の大集落が密集し、また近年の調査によって12基の前方後円墳のあることが確認されている。この内、横穴式石室をもつ前方後円墳は筑紫郡春日町日邦塚、福岡市竹下刻塚古墳などがあり、古墳時代後期（6世紀）をかざるものである。

福岡・那珂平野に、堅穴式石室をもつ前方後円墳のある可能性はのこされているが、現在のところ老司古墳はこの平野の前方後円墳としては最も古い時期のものである。円墳としては卯内尺古墳はやさかのはるものであるが、壮大な墳丘と構造、豪華な副葬品をもつ老司古墳は、福岡那珂平野を支配していた家族の墳墓ということができる。

那珂川の「那珂」²⁷は、日本古代の御津、那の津、「後漢書」「魏志倭人伝」や「漢委奴国王」²⁸印の奴國の称呼をつたえたものと考えられている。老司古墳の被葬者も「奴國」ともいべき那珂川流域を1単位としたクニの首長としてあやまりないであろう。（岡崎）

出土遺物一覧表

第1号石室	農具（鋤先1、鍬2）工具（鉄斧3、鎌5、刀子14、裁手刀子12、砥石1）武器（刀1、劍1、鐵鏟多数）装身具（硬玉製勾玉2、小形圓平滑石製勾玉24以上、碧玉製管玉18、小玉多数、指1）鏡（船載方格規矩鏡1）土器（土師器台1）格外出土遺物（手鏡2、鏡1）
第2号石室	人骨（男性人骨2体）武器（劍3、鐵鏟多数、三角板革縫短甲1）鏡（彷彿變形文鏡）その他（尾鏡1）
第3号石室	農具（鋤先4、鍬3）工具（鉄斧11、鎌6、鬱4、鋤1、刀子10、裁手刀子5、鹿角柄3、砥石1）武器（刀8、劍7、矛3、短甲1、鐵鏟多数）装身具（硬玉製勾玉7、碧玉製管玉115、ガラス製管1、硬玉製垂玉1、小玉1、金環2、櫛1）鏡（船載方格規矩四神鏡1、船載方格規矩鏡1、船載君宜高官内行花文鏡1、船載小形車轂文鏡1、船載三角錐神獸鏡1、船載方格規矩鏡1、彷彿内行花文鏡2）土器（土師器台1、土師器片1）その他（鏡状鐵製品4）
第4号石室	人骨（男性成年人骨1体、男性熟年人骨1体、性別不明左上腕骨1本）農具（鍬1）工具（鉄斧1、鎌3、刀子3、鹿角裝刀子1、鹿角裝不明、工具1、錐狀器1）武器（劍4、矛1、鐵鏟10）装身具（小形圓平勾玉12、鏡3）土器（土師器部台1）



老 司 古 墳

昭和44年3月31日発行

編集 九州大学文学部考古学研究室

発行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社川島弘文社